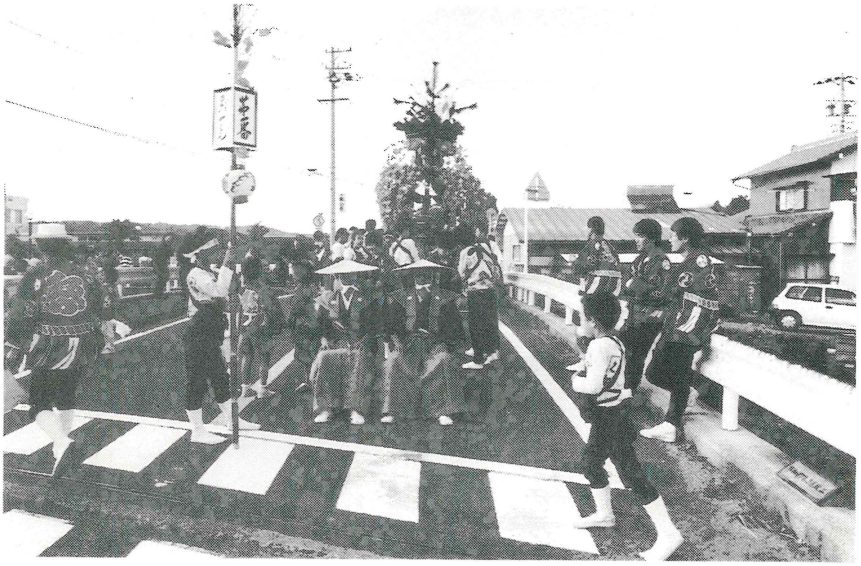
静岡県民俗無形文化財

中村八坂神社の神事と祇園囃子の記録

大東町教育委員会
八坂神社神事と祇園囃子保存会

道具ぞろい

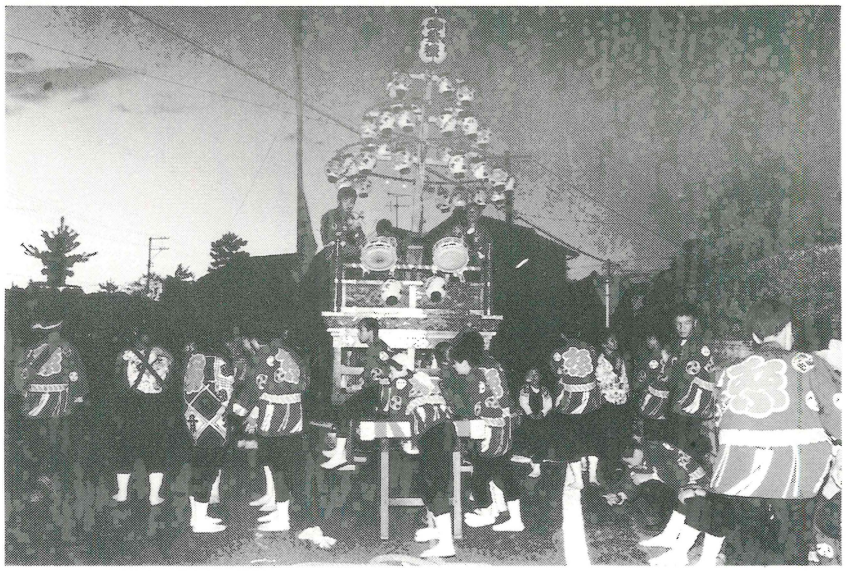
お輿のくじ引き



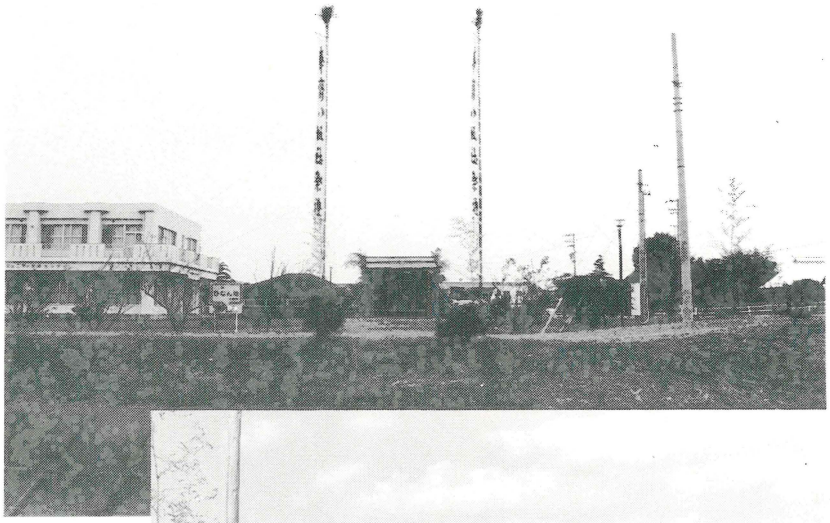
警　護

渡御行列

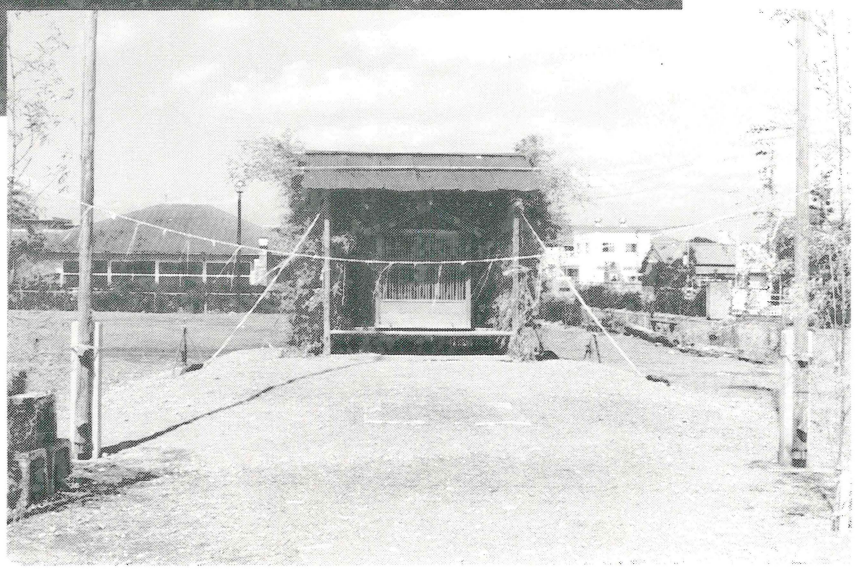
おみこし



宵　宮



2日目
・御旅所



1日目
・御旅所

序文

わたくしたちは、中村の祇園祭、近くは横須賀の三社祭、掛川のかんから祭など古くからあることを知っています。

しかし、それがどのような祭事であるかは、多くの人々に知られていないのではないでしょうか。

昭和五十九年に中村八坂神社の神事と祇園囃子が静岡県の民俗無形文化財として指定を受け、昭和六十二年地元の八坂神事と祇園囃子が保存会のご努力によって書物として明らかにされましたが、すでに残部もなくなりましたので、内容を一部補足し増版することとなりました。

先祖が培われた、風土の中で得た伝統を、私たちの祖先の教訓として代々受け継ぎながらふる里につわる伝承にし、後世に伝えることが現代に生きる者の重大な責務であります。

ふる里の文化を見直し、これから迎える二十一世紀へと伝承されて行くことを願うものです。

平成二年三月

大東町教育委員会

教育長　青野行雄

はじめに

歴史伝統規模とも日本一を誇る祇園祭は、「祇園さん」で親しまれている京都八坂神社の夏祭りです。

この八坂神社で今から一一〇〇年あまり前、疫病退散を祈願して行なわれた祇園御霊会という行事が、現在の祇園祭の始まりです。

こうした祇園牛頭天王の信仰は中世以後各地に天王信仰を生み、その数三〇五三社にのぼりました。

その一つが、応徳二年（一〇八五年）に城東郡中村郷（遠江国中村）に勧請され、今も中村のお天王様として多くの人に親しまれ、その例祭である祇園祭の神事と祇園囃子は昭和五十九年度に静岡県の民俗無形文化財に指定された。

古文献、古文書、故老からの伝承をもとに京都祇園祭と対比しながら、伝統長い中村祇園祭の実相を究明して行きたいと思います。

京都祇園祭

一、由来・歴史

中村八坂神社の祇園祭（天王祭）を知るには、全国の八坂神社の総社である京都八坂神社の祇園祭（天王祭）を知る必要

があります。

八坂神社（祇園社）

祭　神　　素戔嗚尊（牛頭天王）

創　建　　貞観十八年（八七六年）

鎮座地　　京都市東山区祇園町

祇園祭（天王祭）

起　源　　貞観十一年（八六九年）全国的な流行病の蔓延に際し、卜部日良麿（うらべのひよしまろ）が勅を奉って、六月七日六十六本の矛を建てて牛頭天王を祀り、同十四日にその神輿を神泉苑に送ったのが始まりで、天祿元年（九七〇年）から毎年営まれることとなり、祭りに山車が初めて登場したのは、長徳四年（九九八年）京都祇園御霊会だったということです。

もとは神の依代（よりしろ）でしたが、その後様々な飾りをつけ人の肩や車をつけて運び多くの形態を生みました。

保元二年（一一五七年）に鉾が姿をみせるようになったと伝えられます。

特に山車や屋台を曳き出して華やかな行装をくりひろげる祭りが現在全国的にひろがりを示しているが、その源流はすべて祇園祭りであるとも云えます。

二、竜神・水神

祇園社の神紋は昔から知られているように、窠文と左三つ巴であります。これらはともに水神にゆかりのものです。窠文というのは瓜を輪切りにしたような形のもので、左三つ巴は龍蛇の形、つまり龍とその供物として瓜をあらわしているわけです。天王さんに瓜を供えるならわしは、私達の中村でも古くから伝わっています。

こうして祇園社の祭りは、多くは井戸とか川とか海とか水にかかわりが多く、作りもの、幟、彫刻等には龍蛇がよく出て来ます。これは中村祇園祭にも深いかかわりがあります。

《年　表》

	中　村	京　都
奈　良　七〇八		
平　安　七八二		
〃　八六九		京都祇園御霊会を修す
〃　九七〇		御霊会を定例とす
〃　九九八		標山類似の柱を渡す
〃　一〇八五	応徳二年中村郷青谷に天王社勧請す	
〃　一〇八五	素我神社創建	

鎌倉	一一八二	
〃	一二二五	祇園社に長刀を調進す
〃	一三四五	定鉾例の如く、山以下渡る
室町	一三九〇	
〃	一四四三	鉾山以下風流例の如し
〃	一四四六	満勝寺創建
〃	一四四七	八幡社創建
〃	一四九一	神明社創建
〃	一五八六	赤山神社創建
〃	一五八七	八坂社・八幡社修築
		諏訪神社創建
江戸	一六四九	白山神社創建

この年表により中村の神社は、満勝寺創建後に建てられたものがほとんどであることがわかる。

そして天正時代の高天神城攻防の直後に創建再造が多いことに注目されます。

これは高天神城攻防の時、中村の人々は各地（富士・信州・諏訪地方）に避難したが、のち帰村して神社を創建したものと思われる。

二、中村祇園社

1, 名　称　中村八坂神社

2, 所在地　大東町中公文字三石九二七番地

3, 祭　神　素戔嗚尊（牛頭天王）

4, 勧請年月日　応徳二年（一〇八五年）と伝えられる。

（一）歴史と由来

中村祇園祭は応徳二年（一〇八五年）より現在まで約九百年の伝統をもっていることが、古記録及び古老の伝承でわかります。

この伝承を大きく分けると

前期　一〇八五年より一四四六年までの三六〇年間

後期　一四四六年（満勝寺創建）より現在までの五四〇年間

「前期三六〇年間の伝承について」

京都祇園社が創建されてから次々に全国各地にお旅所を設けて牛頭天王が各地に勧請された。歴史的に著名な土方郷にもはやく天王社が勧請されており（土方青谷の里）その神体が亀惣川の洪水のたび三度にわたって中村の現在の青谷の

里に流れついたため、よくよくゆかり多き地としてここを青谷と名づけて祀ることにした。

ここで推理されることは、当時（平安時代）の神仏への信仰深き時代の人々は、神体が亀惣川の洪水で流されたことについていろいろと思考し、また時の指導者にも指図を受けたことと思う。

中村祇園祭がはじめて行われたと云う応徳二年に、畑ヶ谷の素我神社も創建されている。

その時、素我神社に京都より修験道者として居を営んだ権大僧都大越家大教院刑部は京都の祇園祭の事情にも明るく、あるいはこのことに関係があったかとも思われる。

何れにしても天王社は川や水に沿って新たなお旅所をつくり、地方につぎつぎと勧請されて行った。

従って土方地区の青谷と中村青谷との間にも、神幸行事が行われたことがあったかも知れないと想像されます。

従ってこの応徳二年ごろ八坂神社は中村青谷に創建されたと考えられる。昭和四十年代亀惣川改修の際、中村青谷の川底に立派な石畳の神社のあとが発見された。ここに天王社（八坂神社）のあった事実と、その規模の相当大きなものであったこともわかった。

「後期一四四六年（満勝寺創建）より現在までの約五四〇年間の伝承」

中村祇園祭は京都八坂神社の祇園祭をほとんどそのまゝ伝承しています。そして京都祇園祭の変遷をもそのまゝ中村祇園祭に伝承しています。

これは数百年という長い歴史の中で京都天王祭の本流やその変遷を知って、中村天王祭に取り入れる人があった筈です。

そしてその人は、一四四六年京都本満寺日秀上人と愛弟子日住上人が遠州満勝寺を創建なされ、その後歴代の上人様がま

さに京都祇園祭を中村祇園祭に伝承指導された方々であると信じます。

年表から見る中村の神社は、満勝寺創建後に勧請されたものばかりであることがよくわかります。

とくに八坂神社の西に祀られている八幡社の勧請は一四四七年であり、再造が一五八七年である。このことにより八坂神社の「天正丁亥再造（一五八七）」の古文献にてらしてみると、満勝寺創建後の一四四六年ころ満勝寺上人様により青谷にあった八坂神社が大石三石の現在のところに移築されたと思われる。

その理由は二つあります。

1, 青谷八坂社は亀惣川に沿い年々の洪水に悩まされていたこと。

2, 土方青谷の里が雑賀肥後守吉長の領外であったためでもあろう。

神幸の途路に一本松、三本松の植樹されたのも、三石の八坂神社への神幸行事が行われることにはじまったと思う。

「雑賀肥後守吉長と満勝寺」

文安三年（一四四六年）

朝倉の乱に斯波武衡に従って討伐奮戦した雑賀肥後守吉長はその功により城東郡中村郷（遠江国中村）を賞祿として与えられ、雑賀城をつくり満勝寺を創建した。

満勝寺は京都本満寺の日秀上人とその愛弟子日住上人が力を合せて開山した。日秀上人は近衛前関白従一位左大臣通嗣公の子で近衛家の家紋（下り藤にぼたん）をいただき十万石の格式を与えられた。

そして、それ以後明治十四年まで満勝寺歴代上人によって天王祭が行われて来た。

（二）祇園祭及び祇園囃子行事

1, 八坂本社から青谷旧社への神幸行事（本祭より七日前）

神官氏子総代区長若衆列席

迎え太鼓（青谷旧社お旅所前）

旧社お迎え神事

みくじ改式（みくじあらため式）（みくじ取式）山車順幸順位をきめる。

2, 本祭第一日

(1) 垢離（こり）とり　早朝遠州灘海水にて身を浄める。

(2) おみくじ行事　神幸行列の役割をおみくじできめる。

先獅子、天狗、太鼓、笛、幟、神馬、御杖、神輿、御手脇、飛馬、脚立、鉄砲

(3) 道中こき打ち行事

(4) 道具ぞろい

(5) 警護の位取

(6) 宵祭（夜宮行事）ちょうちん棒

(7) 満勝寺参拝

3, 本祭第二日

(1) 大祭　青谷の御旅所

(2) 山車　青谷練り込み

(3) やぶさめ祭

(4) 神幸行事

行列の順序　先獅子の舞い、天狗露はらい、笛、太鼓、幟、神馬、御杖、神輿、飛馬、鉄砲、脚立、お役人

(5) 五反幟祭

(6) 警護　万度　山車御供

道中の行事　満勝寺（満勝寺住職が神輿）参拝

円道橋と三本松休息

ちょうちんの火入れ

警護儀礼

(7) 本社お着き　神輿が本社の周りを一周する（京都では三周）

やぶさめ祭（本社前の並木道）

還御祭典儀式

山車を解く行事（京都も同じ）松をおろす。

お役人のお見送り

五ケ村の別れ

三ケ村の別れ

(8) 各区毎に千秋楽行事

警護の位をおりる式

(9) 山車より松おろし

本祭に山車が八坂本社まで神輿の御供をすまし、山車より松を下ろせば、すでにそこには神も宿っていないとして囃子も一斉にやめ、ちょうちんの火も消すのもその為です。

(10) 「山車彫刻の龍」「五反幟の龍」

祇園牛頭天王につらなる社の祭は、多くは河川、井戸、海など水にかかわりがあります。これはこの神が龍蛇の神であることをあらわしています。

(11) 流鏑馬神事

中村祇園祭では青谷旧社前と八坂本社前とで行われています。

神輿渡御の路の魔をはらい浄める行事である。

(12) 「垢離とり」

神幸行事にたずさわる者全員が遠州灘海岸で心身を浄める行事である。

(13) 「おみくじ行事」みくじあらため

(14) 警　護

警固は、一文字笠、扇子の姿です。京都祇園祭では江戸時代中期ころ出現しました。

そして裃姿は江戸時代の武士の正装であり、それがなぜ当時の中村の百姓にゆるされたのか。これは中村祇園祭が

如何に格式が高いものであったかを物語るものであろう。

「警固の位取り」の式があって警固の任につく、各区大警固二名、細警固二名である。警固は各区を代表する最高の権威者であり、相互の儀礼、神幸行事の開始、進行終了等の宣言をする。

警固の儀礼、言葉、挨拶は極めて大切に伝承されている。

中村の警固の神前での作法は、正式参拝の儀法です。

警護の儀礼言葉を紹介します。

八坂社祭典　警護の言葉（◎印は警護の言葉）

公会堂に於て（かみしもを笠の上に乗せて）

◎　私共警護という大役を務めさせていただきます。

青谷橋南側に於て各区の到着を待ち受ける事、但し警護一名は此の前青谷堤防を通過して所定の位置に着き待ち受けること。堤防上神輿前面通過の際は神輿前にて履物を脱ぎ三歩さがり、最敬礼をし通過すること。

青谷橋南側に於て

◎　御祭礼でおめでとうございます。

◎　仕度は出来ました。何々様御先に。

（何々区様には御先に御免豪ります）

台が神輿前面を通過の際は神輿前にて履物を脱ぎ三歩さがり最警礼をする。

青谷待ち受けの警護は台が青谷堤防西側曲り角迄来たる時

◎　台が練り込みますから台に附きます。

台を出さない場合は

◎　当区が練り込みますから区に附きます。

台の練り込みがすんだら

◎　各々様方には御早うございました。（二区以上の場合）

挨拶終りて元の席に就く。約十二分後立上りて休息言の渡しの席へ進む。

◎　各区艘込も相済みました、休息に致します。

休息と同時響護は御神明様へ途中無事御神輿の御送りの出来る様急ぎ参拝する。

（神社前にて履物を脱ぎ三歩さがり最敬礼をする）

休息後再、青谷に至り、他区早く来り居る場合

（他区一区居りたる場合）

◎　御早うございました。

（二区以上の場合）

◎　各々様方には御早うございました。

この場合着席位置は青谷西口を始となして一、二、三、四、五と着席のこと。

御起ち（練り出し）

神輿が前をお通りの際は前に出て最敬礼をする。

◎　御先に御免を豪ります。（四番の時はこの用なし）

円道橋御着、御起ち

◎　神輿が円道橋へ御着になりました、御順村へ御取次を願います。（三番の時はこの用なし）

二番以下之を受ける時は

◎承知致しました。お帰りになりましたら御一同様によろしく。

（御神輿御起ちの際も御着の時と同様の言葉）

提灯の火入れらる。（之は神輿に火の入りたる後となること）

◎　神輿に火が入りました。役提灯並台に火を入れます。

御順村へ御取次を願います。

◎　承知致しました。お帰りになりましたら御一同様によろしく。

満勝寺参拝

農協入口橋の前にて履物を脱ぎ三歩さがり最敬礼をする。

三本松御着と御起ち

◎　神輿が三本松へ御着になりました。御順村へ御取次を願います。

◎　承知致しました。お帰りになりましたら御一同様によろしく。

（御神輿御起ちの際も御着の時と同様の言葉）

本社御着き

◎　神輿が本社御着きになりました。御順村へ御取次を願います。

◎　承知致しました。お帰りになりましたら御一同様によろしく。

本社練り込み

社殿を西より回り社殿前にて履物を脱ぎ三歩さがり最敬礼をすること。

本社練込み礼が終ると他区の響護の前にすすみ

（二番以後の場合）

◎　何々様には御早うございました。（他区一区居りたる場合）

◎　各々様方には御早うございました。（二区以上の場合）

第四番が着席すると同時に一同の前に進み（これより一番のみ）

◎　各区御揃になりました。席に付きます。

御役人衆様の御見送り

席に付くと御役人衆が前を通って帰るからそれと共に一同前に出て

◎　御役人衆様の御見送りを致しましょう。

これが終ると共に社段下に西向に整列して（笠は取ったまま移動）

◎　此の所に於て御役人衆様お見送りを致します。

（御役人が前を通過する際は一同礼をする）

四ヶ村の別れ

◎　御役人衆様の御見送りも相済みました。四ケ村の別れを致します。

場所を少し変えて西に面し（二番以下）一番は東に向って整列

◎　此の所に於て四ケ村の別れを致します。

◉　御祭礼もつつがなく相済みましておめでとうございます。

お帰りになりましたら御一同様によろしく。

㈱　此の時は◉の所より一層声を張り上げて挨拶する。

公会堂に於て

笠を前に出して

◎　皆様の御蔭をもちまして無事警護を務めさせて頂きました。有難うございました。

以上をもちまして警護は解任となる。（かみしもを脱ぐ）

(15)

「祇園祭の仕組」

封建時代の社会制度、風俗習慣をそのまゝ現在に伝うる稀にみるものである。

お役人

警　固

中　老

若　衆（年若、年番、年がさ、祇園若衆）

(16) 祇園囃子の内容

曲目　道引（屋台下の曲）道中囃子

大間の曲・・・大鼓のぶちとぶちの間のひろきことより。

昇殿の曲・・・神前にて

かみくらの曲（神宿）神様の宿る、神前の曲

徹花の曲・・・これは京都地方で生花を終って花をとりはらうときに徹花という。即ち祭りの終りの意味であり、千秋楽の曲とも云う。

楽器　大太鼓、小太鼓、笛、摺金（鉦とも云う）

面　獅子の面、天狗の面、おかめの面、火吹男の面

(17) 幟（別記）

（三）古記録及び古代より伝わる祭具

祭神、神事、祇園囃子の由来に関するもの

牛頭天王の棟札

御竿除社地取調帳

矢ぶきめ祭馬具記録

狂言芝居の台本、幕

狂言奉納相撲の記録

八坂神社祭事に際しての紛争記録

八坂神社の沿革記録

京都本満寺と満勝寺開山記録

満勝寺開山当時の中村地図

幟　五反幟　貞享元年（約三〇〇年前）

二三番幟　元文元年（約二五〇年前）

しん白幟　延享元年（約二四〇年前）

神輿のおさや　二五七年塗りかえ　享保十三年戊申年仕直し

山車及び彫刻等

（四）民　話

その一　神輿青谷で滞在中、大石の蓮池の蓮の糸ではたを織り、いまだ片袖織り終らぬに七日が過ぎ、青谷の里をお立ちにならなくてはならないので、泣く泣く帰られる神を氏子達が祇園囃子で慰めはげましてお送りするので「泣き宮」とも言う。

その二　八坂神社から青谷旧社に渡御の時、岩稲成さまにはおばさまの神がおいでになり、立ちよると在所に行くのが遅くなるのでちょうちんの火を消し、掛声も止めて静かに通り、又、一本松にもおじさまの神がおいでになるので立寄り

休憩するが、こゝでは子供達が松の葉を神輿に投げつけて迎えるならわしになっている。

その三　宵祭に山車が満勝寺に参拝するようになったいきさつ。

一説には、その昔、中村の祇園祭の山車が海戸前の二丁ごしにさしかかったとき、たまたま参勤交代で通りかかった横須賀城主が「山車の高いところから行列を見下すとは無礼」と大変立腹なさった。村人達は満勝寺に逃げこんで方丈に助けをもとめた。当時満勝寺は十万石の格式をもっていたので、「横須賀様、祭りのことかんべんしてやって下さい」と口をきいて下さり事なきを得たと。

又一説には、幕府から贅沢禁止令の出ている際中村では祇園祭を行い、横須賀様のお叱りを受けたとき満勝寺の方丈が詫びてことなきを得たと。

何れにしてもこうしたことに対する満勝寺への感謝の意味で、宵祭に満勝寺参拝をすることになったと伝えられている。

（五）祇園祭神事と祇園囃子のもつ民俗文化財的価値

中村祇園祭の文化財的意義は一言に云うならば、京都祇園祭の神事を延々九百年にわたって忠実に伝承しているということです。以下そのことを京都祇園祭と比較しつゝ確かめてみたいと思います。

(1)　お旅所（オハケ）青谷のお仮屋

方一間のところに青竹を立て注連縄を張り中に御幣を立て神の宿る所とした。三本松の休息所もまた同じである。

このお旅所も京都本社のお旅所にならったものである。

(2)　神　馬

祈願成就の報　（お礼）として神社に馬を献じるならわしで、この馬を神馬という。

御輿が作られてから神馬は神輿のお供をするようになった。

(3) 神　輿

神輿を揺り動かすことを「神輿ぶり」という。

昔から「氏子勇めば神勇む」といわれます。

神輿をかつぐ人々（輿丁）つまり氏子が元気に神輿を揺り動かすことは、その氏子の地域の人々の生命活動や神に崇敬する念の強さを示すものです。

そしてそれを見た神も喜び、さらにその地域の繁栄を助けてくれることになるわけです。

神輿をかつぐということは、神のすぐそばにいることで、神人一体となれるわけです。

神輿をかついだ輿丁が祭りの終ったあとで「神わかれ」の式を行うことが例になっています。

(4) 「山車」は

祭りの時車の上にさまざまな飾り（万度ちょうちん、松の木、人形、鉾、長刀、花、太鼓等をつんで曳き出すもので、「やたい」とも「だんじり」とも云う。

山車は神輿と同じく神の乗り物であります。

(5) 「万度」

長い柄をとりつけて捧げもつ行燈で「小万度」と言い「御礼祭」とか「氏子名」「おみくじ順位」など書き、花すすき等で飾り山車の先頭に立つ。また「万度」は山車の上の松や人形を飾る台にもつけます。

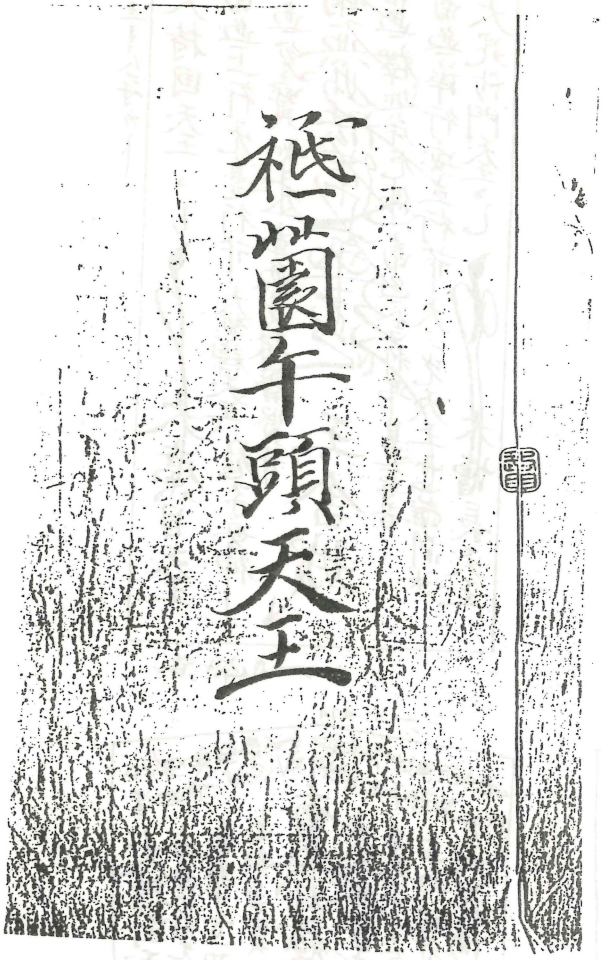
「一万度」の意味するように永久に祇園祭をし、永久の繁栄を祈ったものです。

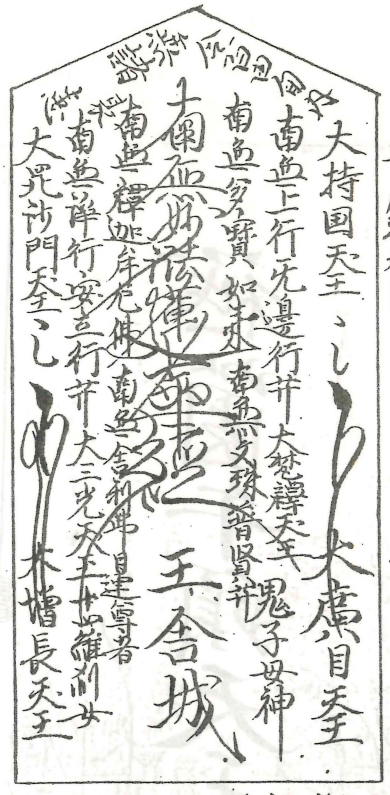
「万燈」と書くのもありますが、祇園祭の場合は「万度」です。
「万度」は祇園祭行事の当初の形で後傘鉾となる。

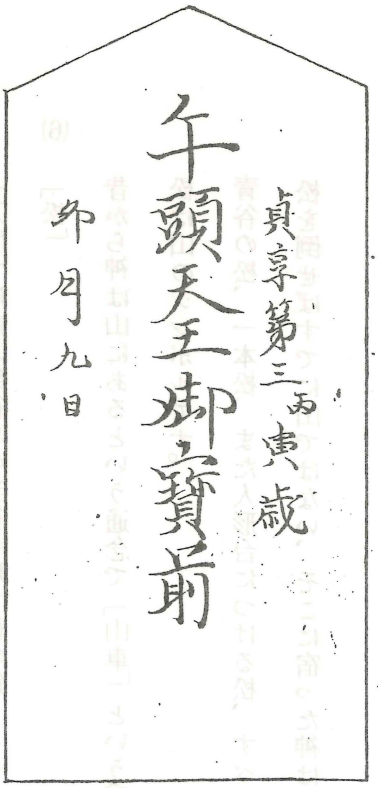
(6)

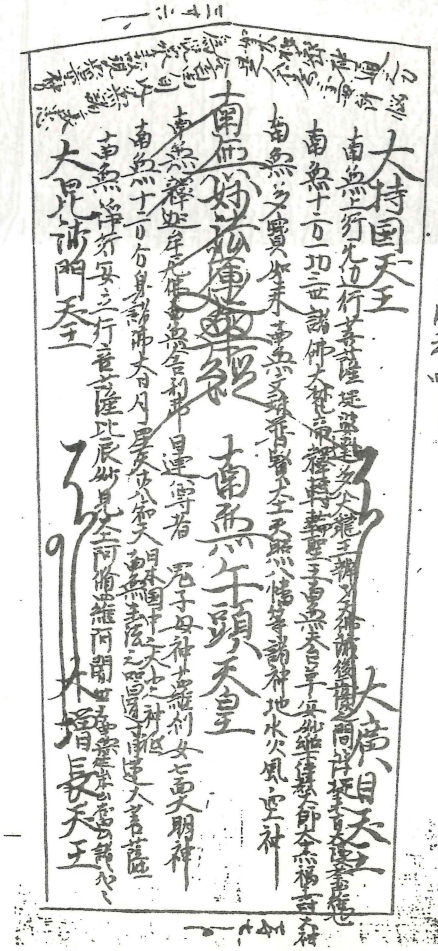
「松」

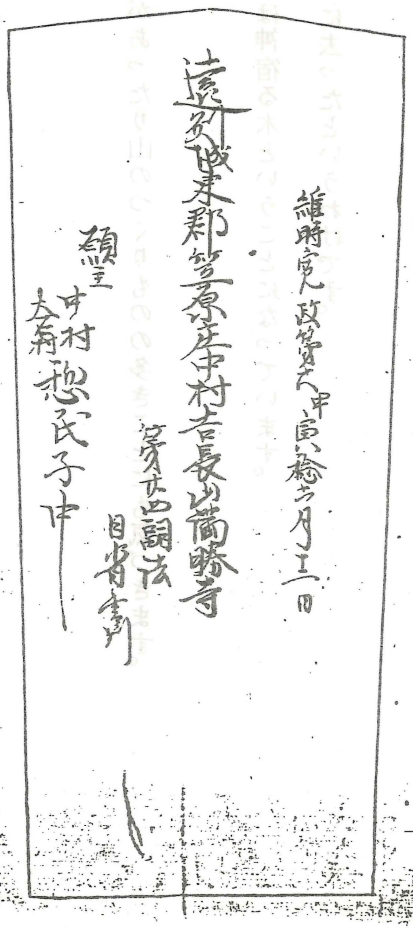
昔から神は山にあるという通念で「山車」という言葉があったり山のつくりものの多きことにも気づきます。
松は山のシンボルです。
青谷の松、一本松、また人形台につける松、すべて松は神宿る木ということになっています。
松を倒せばすでに山ではない、そこに宿った神はすでに去ったというわけです。

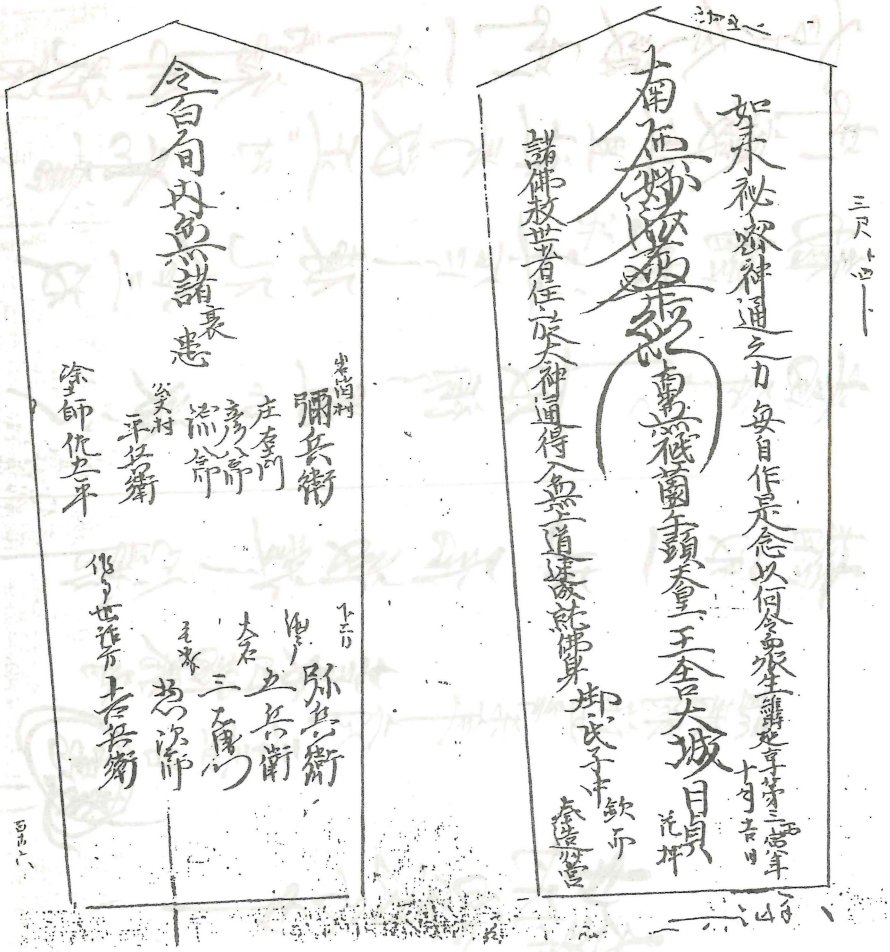



大持国天王
南無十方一切諸佛
南無多寶如来
南無釋迦牟尼佛
南無舎利弗
南無妙法蓮華経
南無十方一切諸佛
南無多寶如来
南無釋迦牟尼佛
南無舎利弗
南無妙法蓮華経
大増長天王
大広目天王
鬼子母神
王舎城
大毘沙門天王


貞享第三丙寅歳
午頭天王御宝前
九月九日


大持国天王
南無十方一切諸佛
南無多寶如来
南無釋迦牟尼佛
南無舎利弗
南無妙法蓮華経
南無十方一切諸佛
南無多寶如来
南無釋迦牟尼佛
南無舎利弗
南無妙法蓮華経
大増長天王
大広目天王
鬼子母神
南無午頭天王
大毘沙門天王


維時寛政第六甲寅歳七月十二日
遠州城東郡笠原庄中村吉長山満勝寺
日省書



今般御一新ニ付神仏混淆
御廃止且社号改正ニ付
勧請札並ニ棟札合三枚
当寺ヘ引取渡置ク仰付
請取一札右渡遣ス仍為

維時明治四辛未年六月　日　　長山満勝寺
　　憲

中村
大名村　惣氏子中

時名主
大石村　清六
同
上方村　嘉一郎
同
南方村　惣十郎
同
谷又村　宇平治
同
老坂村　清治郎

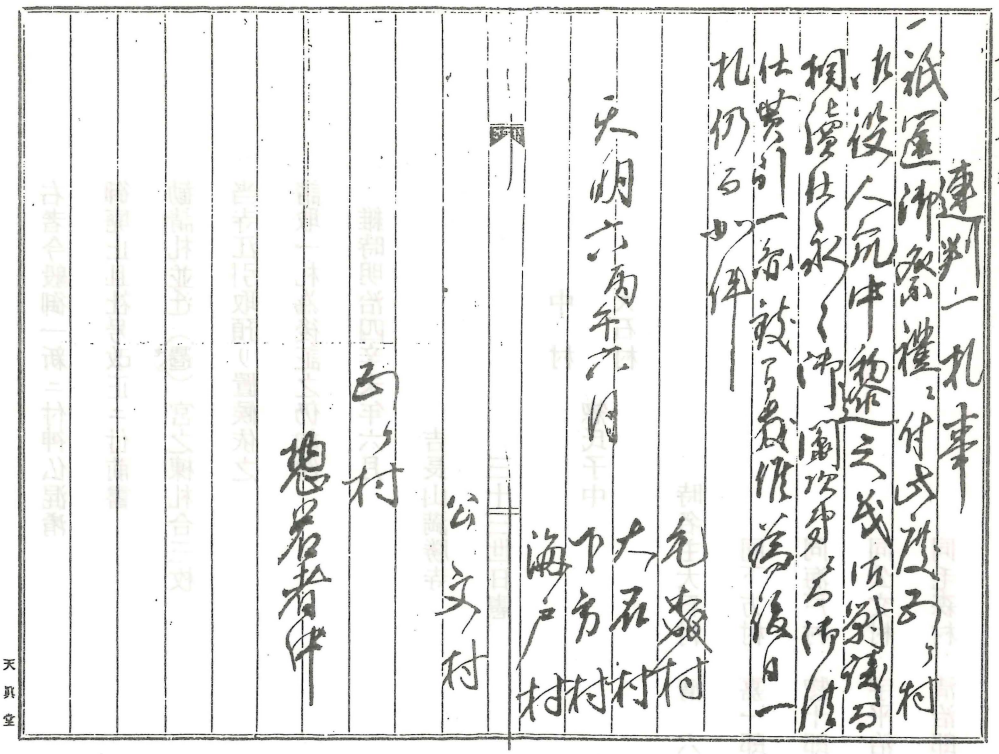
（前頁翻字）　その一

右者今般御一新ニ付神仏混淆
御廃止且社号改正ニ付前書
勧請札並迁（遷）宮之棟札合三枚
当寺江引取預リ置候依之
請取一札為後証之仍如件
維時明治四辛未年六月

吉長山満勝寺
三十三世日憲

中　村
大石村　惣氏子中

時名主大石村　清　六
同下方村　嘉一郎
同海戸村　惣十郎
同公文村　宇平治
同毛森村　清治郎



その二

連判一札事

一、祇園御祭礼ニ付此度五ヶ村
御役人衆中邂之義御対（對）議ニ而
相続仕永々御みくじ次第ニ而御礼
仕貰引一圓致間敷候為後日一
札仍而如件

天明六丙午六月　　毛森村
　　大石村
　　下方村
　　海戸村
　　公文村

五ヶ村　惣若者中

（注）
邂（レイ）＝少しゆるやかに歩く意味です。

静岡縣管下遠江國城東郡中村大石村字平堤壱番

村社

式外　八坂神社

一祭神素戔嗚尊

一由緒　天正十四丙戌年六月勧請貞享元甲寅年四月
修繕延享三丙寅年十月改造寛政六甲寅年
六月改造明治十二年九月五日村社加列元来黒印
除地無之毎年六月七日字青谷江遷御シ神酒
強飯ヲ供ス十四日本社江還御ノ行列左ノ如シ先
獅子次鼻天狗次笛吹大鼓次幟次神輿次榊
連次飛聖三足次幟次米ヒ物五本也本社還御
ノ後神酒強飯ヲ供

一本社　間口壱間　奥行壱間三尺

一拝殿　間口四間　奥行四間　但両覆兼

一境内坪数四百八拾三坪　官有地第一種

一氏子三百七十戸人員千百四十人男子五百七十五人　大石村全戸
三百六十六人　中村三百四十戸内
三百六十六戸

一静岡縣庁ヨリ距離拾五里

右ハ明治十二年本縣一内第三十一号御達ニ依リ
更ニ取調候処相違無之候也

明治十六年八月三十日

古　中村氏子惣代
西郷伊平
西郷七五郎

大石村氏子惣代
大橋重次郎

静岡縣令大迫貞清殿

前書之通リ相違無之ヲ以

中村戸長
渡辺富五郎

大石村戸長
渡辺清六